

【愛着だって発達する?! その①】

「愛着」っていうと何かベタベタくっつくことだけのことを想像する方が多いのではないかと考えますが、それは大きな誤解であって、乳幼児時代に母と子がベタベタくっつくのも確かに「愛着」であるけれど、それは大きな「愛着」の枠組みから考えればほんの一部分のできごとであると考えて欲しいと思います。さもないと「愛着」の形成が遅れた自閉症スペクトラム障がいの方に、例えば25才で「愛着形成」の支援を提供しようとするときに「もう大人なんですから、身体に触れたり、触れさせたりすること、特に異性に対しては良くないことです」「だから愛着形成の支援はできません」などというトンでもない結論を導き出してしまうことになりかねません。

「愛着」とは、広く「基本的信頼感」と同義であると考えられると思います。「基本的信頼感」とは今から60年ほど前に、精神分析家のエリクソンが提唱した概念ですが、「基本的信頼感」を獲得することができた子どもは、希望を持ち、今後出会う様々なものを「信じる」ことが可能になると言われていますから、まさに「基本的信頼」とは「愛着の形成」をベースに外界に対する絶対的な安心と信頼を手に入れ、自己肯定感を高めた心理状態を指し示すと思われるます。

私たちが、支援困難事例として出会う強度行動障がいを示す方々、あるいは被虐待の成育歴ある方々の多くは、この「基本的信頼感」を得ることができないまま、結果として外界は自分を脅かす対象で、したがって不安や恐怖ばかりを感じ、自己否定感ばかりを膨らませた方々だということができます。「オギャー」と泣いたら来てくれて、自分の不快を快に変えてくれる人がこの世界には居る、これが基本的信頼感のスタートです。この乳児に対する母親の献身は、「私は応答に値する存在だ」と子どもの心に根づかせます。これが自己肯定感の始まりです。ここで躓けば、この先の心の発達は砂上の楼閣になってしまうのです。

私たちが出会った時、18才のK子さんは、すでに強度行動障がいの状況があって、「こんにちは」の挨拶に対して、「かわいいね」の褒めことばにも、「ちょっと待っててね」

のお願いに対しても、必ず、つねったり噛みついたり行動がありました。落ち着いて考えれば、つねったり噛みついたり、確かに彼女なりの返事なのでしょうが、これではやりとりをしようにも支援職員には恐怖感ばかりが先だって、時間の経過とともに、彼女が近づけば逃げる、離れる、遠ざけるというようなことになっていきます。先ほどの「発信すれば必ず応答してくれる人がいる」という図式に当てはめれば「発信してもそれに応じてくれる人がいない」それどころか「発信するとそれは拒否され、否定され、無視される」という状況が生じていると考えることができます。これでは基本的信頼感が育つはずもなく、絶対的な不信感を日々膨張させているだけですから、行動障がいの状況から脱することができるはずがありません。

愛着とは、あるいは基本的信頼感とは、「発信すれば、その発信に対して、必ず肯定的な応答がある」ことで育ちます。それは、相談支援の場で「今度の外食ではラーメンを食べたい」とラーメンのカードを選択し、その結果、実際に「ラーメンを食べに行ったら」ということが生じていけば、これがまさに「発信に対して肯定的な応答があった」という事態で、愛着＝基本的信頼感を育てたということになります。

K子さんは次第に支援職員のそばにふらりとやって来て、その横にちょこんと座るようになり、そのうちに膝の上に座るようになりました。彼女の示す「初めての肯定的なアプローチ」に私たちは「肯定的に応答する」ことが、心を発達させていくことを知っていますから、笑顔でそれを受け入れていきます。彼女はそうにして外界に対する信頼を手に入れていったのです。

そして、時は流れて、今年の夏、彼女に初めてのことが起こったのです。支援職員が翌日のスケジュールを掲示する夕食前の時間帯に、決まって眼球が上転し、尖足で歩き回り、自分の居室に掲示してある外出や面会のスケジュールを破って食べてしまうというのです。それがひどい時には数時間も続くというのです。実は、一見否定的に見えるこの行動が、彼女の担当職員への愛着が十分形成された証拠を私たちに教えることになったのです。つづく…。